ひょうご人権ジャーナル

ひろげよう こころのネットワーク

きずな

KIZUNA

2015
平成27年
1

特集テーマ

つながりづくり

震災20年

つながりあうまちづくり

2 巻頭言「つながりが築く兵庫の未来」
井戸敏三（兵庫県知事）

3 グラフで見る「特に関心がある人権問題」

4 「家族・人とのつながりの大切さ
—震災報道の現場から—」
杉尾秀哉さん（TBSテレビ報道局 解説室長）

5 「個人的なつながりをいかに再生するか？
—東日本大震災の教訓をふまえて」
阿部真大さん（甲南大学文学部 准教授）

6 「学びの里 日置と石門心学　地域づくりに先人の志を」
向井祥隆さん（日置地区まちづくり協議会 事務局長）

7 「ハンセン病を正しく理解するために
加西市人権研修会フィールドワークに参加して」

8 情報ぷらざ

兵庫県マスコット
はばタン

兵庫県・（公財）兵庫県人権啓発協会

特集

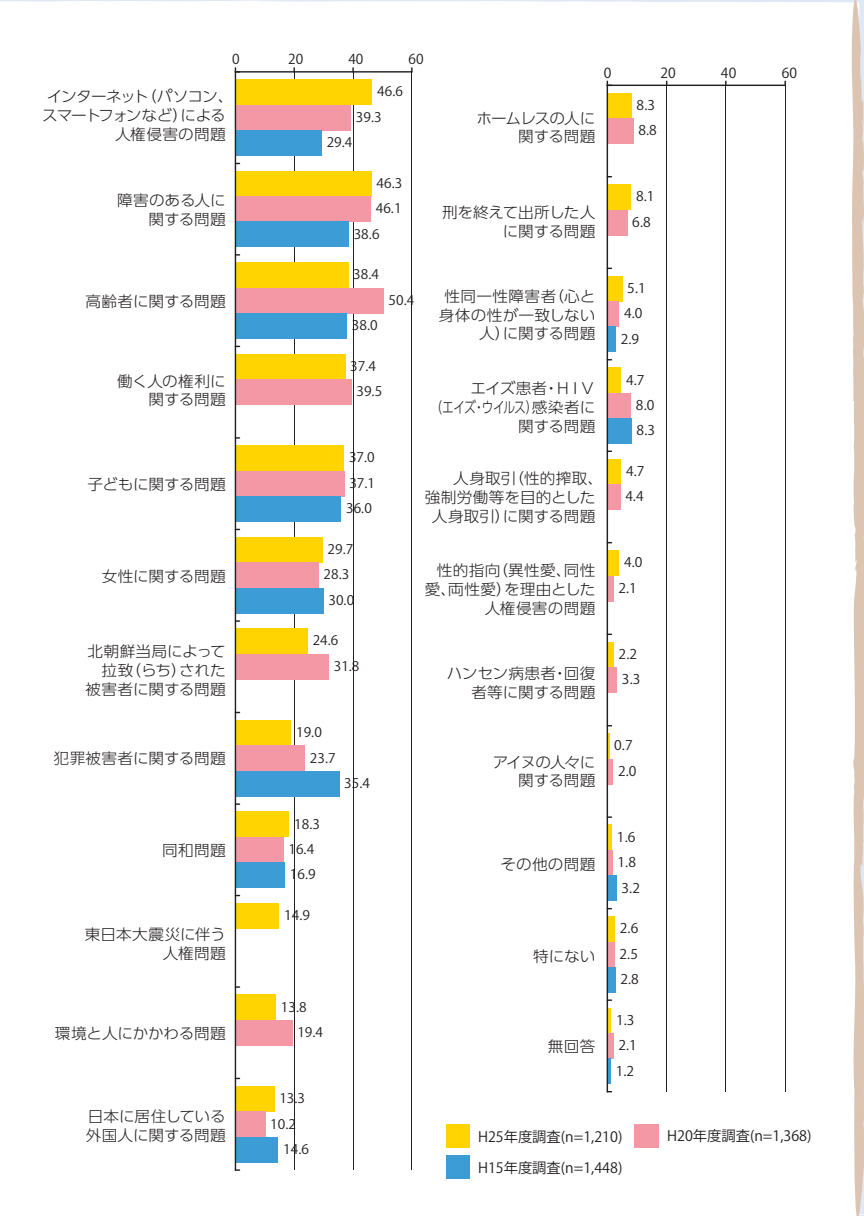
グラフで見る 特に関心がある人権問題

阪神・淡路大震災では、私達は人と人とのつながりの大切さを学びました。しかし、最近は社会から孤立している人や孤独死が増えており、つながりの希薄化が進んでいると言われています。震災から20年を迎え、改めて皆がつながりあって、幸せに暮らすことのできる地域づくりについて考えてみましょう。

平成25年度 人権に関する県民意識調査の結果より

特に関心がある人権問題をあげてください。

（○は5つまで　※H15年度調査では○は3つまで）



特に関心のある人権問題をみると、「インターネットによる人権侵害の問題」が46.6%で最も高く、「障害のある人に関する問題」（46.3%）が4割台となっています。以下、「高齢者に関する問題」（38.4%）、「働く人の権利に関する問題」（37.4%）、「子どもに関する問題」（37.0%）が3割台、「女性に関する問題」（29.7%）、「北朝鮮当局によって拉致された被害者に関する問題」（24.6%）が2割台で続いています。

どれも等しく大切な人権問題です。正しく理解し、つながりあうまちづくりをめざして一緒に考えていきましょう。

巻頭言

つながりが築く兵庫の未来

兵庫県知事
（公益財団法人兵庫県人権啓発協会会長）
井戸敏三

一瞬にして6千人を超えるかけがえのない命を奪い、ふるさと兵庫に深い傷跡を残した阪神・淡路大震災からまもなく20年を迎えます。

大震災は未曾有の被害とともに、高齢化や個人主義化が進む近代都市の問題点を浮き彫りにしました。そのようななかでも、震災直後、地域住民が声を掛け合い、救出活動や消火活動に取り組む姿が見られました。避難所や仮設住宅などでは、被災者同士の支え合い、助け合いが生まれました。また、内外から多くのボランティアが駆けつけ、心のこもった有形無形のご支援をいただきました。その心温まる光景は今も心に残っています。

この20年間、内外から多くの支援や励ましをいただきながら懸命の努力を続けてきました。創造的復興の歩みのなかで私たちは、人と人とのつながりや地域での助け合いの大切さを学びました。

こうした経験や教訓を生かそうと、東日本大震災をはじめ、トルコや台湾など国内外の被災地の復旧復興を支援してきました。助け合いの輪を広げることは、いただいた支援に対する最大の恩返しなのです。

一方、経済的な豊かさや効率性を追い求めてきた結果、生活や街の風景は画一化し、心の拠り所である家族や地域社会との連帯感の喪失が懸念されています。最近では、生活様式も変わり人間関係が希薄になるなか、インターネットによる人権侵害への関心が高まっています。また、児童虐待や自殺、高齢者の孤独死など、地域から孤立し、助けが得られないまま事件となって初めて顕在化する事例も多く見受けられます。

元気で安全安心な地域づくりの基本は、人と人、人と地域、地域と地域とのつながりです。だからこそ、私は、生まれ育った地域での様々な体験や、そこに暮らす人々とのふれあいを通じて育まれる「ふるさと意識」を持って欲しいと考えています。また、生まれ育っていなくても、そこで生活している人が、そこを故郷と思えるような、人と人、人と地域とのつながりを持ってもらえればと願っています。ふるさとの人々との絆は、命の尊重や思いやりにつながります。ふるさとの自然や文化、産業にふれる体験や地域活動は自信に結びつき、大きな底力となります。

兵庫の未来を切り拓くのは、ふるさとを愛する人々です。共に生きることの大切さを改めて胸に刻み、「安全元気ふるさと兵庫」の実現をめざしていこうではありませんか。

本年もどうぞよろしくお願いします。

個人的なつながりをいかに再生するか？
―東日本大震災の教訓をふまえて

甲南大学文学部 准教授
阿部（あべ） 真大（まさひろ）さん

人々は様々な人間関係のなかで生活していますが、大規模な自然災害は、こうした人間関係のうち、何が頼りになって何が頼りにならないかを顕在化させます。私は東日本大震災発生後の2012(平成24)年に被災三県調査と全国調査を大規模におこないました。その結果から、東日本大震災において、家族、親せき、友人、近所の人といった「個人的なつながり」の信頼感が、行政やNPO、民間企業といったそれ以外のつながりと比較して、圧倒的に高かったことが分かりました。

その理由としては、東日本大震災が「想定外」の大震災であったことが考えられます。つまり、行政やNPOや民間企業が想定できないほどの巨大な災害であったため、その機能が無力化し、人々は個人的なつながりに頼らざるをえない状況に追い込まれたのです。

これからも、こうした「想定外」の大震災が起きないとは限りません。その時に備えて、わたしたちは普段から個人的なつながりをしっかりとつくっておく必要があります。これが、東日本大震災が私たちに残した教訓です。しかし、「無縁社会」といわれている今、家族や親せき、友人、近所の人といった個人的なつながりをもっていない人が増えています。どうすればよいのでしょうか。

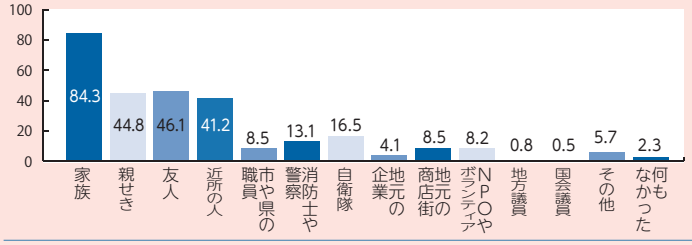
実は、このたびの調査では、東日本大震災において、個人的なつながり以外で唯一、「商店街」とのつながりが（全国調査と比較して）極めて高い信頼感であったことが分かりました。つまり、商店街が大きな自然災害に「強い」ことが示されたのです。私はここに、個人的なつながりの再生のヒントがあると思っています。商店街とのつながりは、家族や親せきなどの人のつながりほどは個人的ではないけれど、行政やNPOとのつながりよりは個人的なものです。つまり、それは個人的なつながりと個人的でないつながりの中間にあるものではないでしょうか。

私が東日本大震災後、被災地を訪れた際にも、商店街の人々が語ったのは、商売の話だけではなく、そこに集う人々の話であり、地元の話であり、彼らがそのなかでどう生きてきたか、これからどう生きていきたいかという話でした。それは、そこがショッピングモールやコンビニのような単なる「消費の場」ではなく人々のつながりを生む「生活の場」であるからこその語りだったと言えるでしょう。

核家族化と郊外化の進展は、「個人的なつながり」と「個人的でないつながり」の間の距離をかつてないほど広げてしまいました。我々は今一度、その重なり合う場所にあったものに想像力を働かせるべきでしょう。その先に「無縁社会」を乗り越える道筋が見えてくるかもしれません。

被災三県（岩手県、宮城県、福島県）調査 （実施月日2012年11月 標本数n=388）

今回の震災で、あなたにとって頼りになった人や組織は次のうちどれですか（複数回答、単位は%）



プロフィール

1976（昭和51）年岐阜市生まれ。東京大学卒。社会学者。専門は労働社会学、家族社会学、社会調査論。主な著書に『搾取される若者たち―バイク便ライダーは見た！』（集英社）、『居場所の社会学―生きづらさを超えて』（日本経済新聞出版社）、『地方にこもる若者たち―都会と田舎の間に出現した新しい社会』（朝日新聞出版社）などがある。

家族・人とのつながりの大切さ

―震災報道の現場から―

震災から学んだこと

TV報道の世界に身を置いて33年。阪神・淡路大震災は、その私にとっても「驚天動地」の出来事でした。神戸の町をリポートしながら涙が止まらなかったのを、今でも鮮明に覚えています。

それからわずか16年で、今度は東日本大震災が起きました。死者・行方不明者合わせて2万人余(震災関連死を含む)。阪神・淡路大震災を遥かに上回る「異次元の災害」になりました。

この仕事をしていてつくづく思うのは、「世の不条理」と「人の命のはかなさ」です。何の罪もない市民が理不尽にも突然、命を奪われる。そして、生死の境はまさに紙一重。すんでの所で偶然助かった人もいれば、無念にも犠牲になった人がいます。いつ自分がそうした立場に立たされるか分かりません。二度の大震災は、その冷厳な事実を我々に突き付けました。

一方で震災は私達に数多くの事を教えてくれました。例えば、大災害に遭っても冷静で、忍耐力があって、規律と秩序が守られている被災者の人たち。世界中のメディアが感嘆したこうした姿は、普段から地域社会での「人と人のつながり」や「絆」があったからこそに他なりません。阪神・淡路大震災で被災し、去年1月他界した私の父も、震災後にしみじみと私にこう話しました。「こんなにご近所さんの有難さを感じたことはない。お互いに同じ境遇だから辛さがよく分かる」。

では人間の幸せの原点はどこにあるのでしょうか?

つながりづくりをもう一度

ヒマラヤ山脈の麓にあるブータンという小国。この国はGDP(国内総生産)ではなく、GNH(国民総幸福量)を上げるのを国是とする、世論調査をすると実に97%が「幸せ」と回答する国です。そこでブータン国民に「なぜ幸せなのか?」と問うと、「家族全員が健康で一緒にいられること」と答えます。また、ブータンのGNH担当大臣は「人間の幸せは家族や地域での、人と人とのつながりの強さによる」と話しています。

そう言えば、東日本大震災の後の世論調査で「震災後、家族の絆に対する意識や行動を変えた」と回答する人が半数近くに上ったのもこれと符合します。

ところが、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」。震災から時が経ち、記憶が薄れるにつれて、こうした意識が次第に希薄になって来てはいないでしょうか?

生きていられることに感謝しつつ、家族や地域での「絆」の大切さを噛み締める、震災の原点にもう一度立ち戻りたいと思います。

TBSテレビ報道局
解説室長
杉尾(すぎお) 秀哉(ひでや) さん

1957(昭和32)年、兵庫県生まれ。1981(昭和56)年 東京大学文学部社会学科卒業。同年、(株)東京放送に入社。制作センター報道局ニュース部、警視庁記者クラブ等に所属し、1993(平成5)年から「JNNニュースの森」キャスターを担当。ワシントン支局長などを経て現職。「朝ズバ」コメンテーターを経て、現在「週刊BS-TBS報道部」キャスター、「いっぷく」「ひるおび」等情報番組のコメンテーターなど数多くの番組に出演。

取材ノート

国立療養所「長島愛生園」歴史館

ハンセン病を正しく理解するために

加西市人権研修会フィールドワークに参加して

ハンセン病は治る病気

ハンセン病は、らい菌という細菌による感染症ですが、感染したとしても発病することは極めてまれで、しかも、万一発病しても、現在では治療法も確立し、早期発見と適切な治療により後遺症も残りません。

日本では、1996(平成8)年まで強制隔離政策がとられ、行動、住居、職業選択、学問、結婚の自由が制限されるなど患者の人権が傷つけられていました。現在、入所者のハンセン病自体は治癒していますが、戦前戦後の過酷な処遇により、後遺症に苦しんでいる人が多くおられます。ほとんどの元患者は70歳を超えており、経済的な自立が困難です。また、差別や偏見を恐れて、故郷に帰ることができないといった問題もあります。

正しい理解を求めて

加西市では、平成15年から国立療養所「長島愛生園」(岡山県瀬戸内市)を訪問しています。入所者(自治会)との交流等を通じて、ハンセン病に対する正しい理解を深め、差別や偏見の解消に向けて啓発することが目的です。

今回の参加者は21名。県立北条高校の生徒3名も参加しました。参加の動機は、所属する放送部が、NHK杯テレビドキュメント部門へ応募する題材に、ハンセン病を取り上げたこと。入所されている加西市出身の歌人谷川秋夫さんとの交流を繰り返し、今回の研修の機会も活用して取材を続けています。生徒の一人は「このような悲しい歴史があったことに驚いている。当事者からの思いをしっかりと伝えたい」と作品を通した啓発に意欲をみせています。また、別の参加者は、かつて療養所で暮らしていた友達をより深く理解したいと回数を重ねて研修に参加しています。

愛生園の歴史を解説する学芸員の田村さんは、「元患者を奇異な目で見るのではなく、後遺症が残る障害のある人として隔てなく接してほしい。正しくハンセン病を理解することで差別・偏見は取り除くことができます。そのためにはまず関心を持つことが大切」と力強く語りかけました。

園内の史跡を巡り、当時の状況に思いを馳せながら、同じ過ちを繰り返さないことを誓い納骨堂に献花しました。

納骨堂に献花する参加者。
戻るところがない遺骨約3500柱が眠っています。

国立療養所「長島愛生園」

国立第一号の療養所として1930(昭和5)年に開設。当時は2000人近くの方が収容されていました。現在、入所者は232人。入所者の平均年齢は84歳で、平均在園年数は59年になります。後遺症のために社会復帰が困難な状況で、愛生園を「終の棲家」として生活されています。歴史館が併設され、個人見学も受け入れています。

TEL 0869-25-0321

映画紹介

神戸在住

阪神・淡路大震災20年／サンテレビジョン開局45周年記念作品として製作されましたが、震災のことが物語の中心ではなくベースとして描かれています。

東京で育った主人公の辰木桂は、父親の転勤もあって神戸の大学に美術志望で入学します。ナイーブさのあまり、なかなか心を開かない、俯き加減で生活する彼女でしたが、何とか友人もできます。モデル目指してフランスにまで行ってしまう積極性にあふれた友人に目を開かされたりします。また、売り上げを各地の震災復興に寄付するなど社会貢献に熱心なイラストレーターの日和洋次と知り合い、大きな影響を受けます。

震災の記憶を含めて神戸から様々なことを学んだ桂は、尊敬する日和の突然の死も受け止めて、前を向きはじめます。

桂とは性格の異なる母親が、神戸を大いに楽しんでいるいくつかのシーンは愛嬌で、神戸・阪神のあちこちが温かく写される映像には心が和みます。

1月17日からシネリーブル神戸で映画版(96分)が公開され、1月17日20時からサンテレビでTVドラマ版が放送されます。

監督:白羽弥仁(神戸在住)
脚本:安田真奈(神戸大学出身)
出演:藤本泉、菅原永二、浦浜アリサ、竹下景子

お問い合わせ
078-334-2126
(シネ・リーブル神戸)

学びの里 日置と石門心学 地域づくりに先人の志を

日置地区まちづくり協議会
事務局長
向井 祥隆 さん

学びの歴史遺産を復活

篠山市の東部に位置する日置地区。京都に通じる国道372号線沿いの地域だけに、多くの神社仏閣をはじめとする歴史遺産が残っています。「中立舎」もその一つ、江戸時代に地域の学びの拠点として開設された※石門心学の学舎として現存している全国でも数少ない建物です。平成18年に、少子高齢化の波の中で疲弊していく地域を活性化させることを目標に「日置地区まちづくり協議会」が発足し、その活動の拠点施設として「県民交流広場事業」を受けて整備しました。10年近く無人となり取り壊される危機にあった家屋、歴史遺産でありながら忘れられようとしていたものが、家屋を再活用する「古民家再生」のブームもあって復活しました。

学びの志を継承

「中立舎」は今から218年前、寛政8年(1796年)に当時の大庄屋八上新村波部六兵衛により篠山藩に出願し、許可を得て開舎されています。石門心学の二世とされる手嶋堵庵を開祖とし、多くの門弟が講義に訪れました。

学びが生かされている実感

当時の古文書の中に昼間は6歳から14歳まで、夜間は15歳から25歳までが入れ替わりながら講義を受け、一番多い日には904人が来たと記されていますが、地域の青少年層のほとんどが学んだと思われる数字です。明治5年に「学制発布」され、地域に学校が設置された時には、各地で子ども集めに四苦八苦していたことから考えると勉学に対する地域の関心の高さを知ることができます。

心合わせは学びの成果

日置地区のまちづくり協議会には自治会・女性団体・教育福祉関係団体など21の組織が加盟しています。今まで単独の活動であったものが連携することで、共通の地域課題への取り組みが始まりました。ふれあい福祉部会の「いきいきサロン」は毎月2回、一人暮らし高齢者が集います。安全安心部会の防災訓練やふるさと交流部会の盆踊りと通学合宿も開催。協働事業で顔なじみとなり、スムーズな人間関係の中で互いの理解と思いやりが醸成されていきます。石門心学の教えは庶民の生きる力となって日置の地に根付き、人生哲学となって継承され、地域づくり活動の根幹となります。日置の地域づくりが「学びの歴史」である「中立舎」とともに存続し継承されることを願っています。

※石門心学は、江戸時代中期に京都で活躍した思想家・教育者である石田梅岩が、仏教や神道、儒教・道教等の粋を集め、心学道話としたもので、町民や農民、子どもや女性にも「正直」「勤勉」「倹約」「質素」の大切さを教えたものです。

(上)通学合宿の様子。(下)中立舎の入り口に下がる行燈には、まだ男尊女卑・武家中心の社会であった江戸時代に、武家の学びを町民・農民、さらには子どもや女性をも対象に教育実践していたことが記されています。受講料を無料としており、当時として画期的な取組であったことがうかがえます。

プロフィール

1948(昭和23)年、篠山市生まれ。篠山市に勤務し、福祉部長、社会福祉協議会事務局長(理事)などを務め、2012(平成24)年に退職。現在は、保護司・篠山市社会教育委員会議長など多くの役職を兼任し、地域活動に積極的に参加している。「まちづくり」を中心とした幅広いテーマで講演を行う。著書は「文化共同のネットワーク」(共著)青木書房など。

平成26年度人権啓発ビデオ

『あなたに伝えたいこと』が完成しました。

この作品のテーマは「インターネット時代における同和問題」です。

同和問題は、様々な対策の結果、生活環境などハード面の改善は進みましたが、結婚差別や身元調査など意識の面では依然として課題が残されています。また、インターネットには、利便性とともに、匿名性に関する誤った理解による差別的な書き込みやネット依存など陰の部分があります。

この物語の主人公は、ごく普通の若い女性です。物語が進む中で、彼女は、自分の祖母や母が同和問題でつらい思いをしてきたことを知ります。彼女の結婚話を中心に、恋人や友人、家族などとの関わりを通して、この問題が決して他人事ではないこと、ネット上の情報だけではなく実際に人とふれあう中で、お互いを正しく知り合うことが同和問題やすべての差別をなくしていくために重要であることを、明るい希望とともに伝えます。

出　　演／崔岡萌希（つるおかもえき）、根岸季衣（ねぎしとしえ）、中村育二、高田敏江　ほか
企　　画／兵庫県、（公財）兵庫県人権啓発協会
企画協力／兵庫県教育委員会　製作／東映（株）

字幕副音声付／36分／活用ガイドあり

●貸し出しについて
（公財）兵庫県人権啓発協会研修部　TEL 078(242)5355

●購入について
東映（株）関西営業推進室　TEL 06(6345)9026

イベントガイド

神戸市 子どもたちへの メッセージ運動展2015	日時 1月15日(木)～21日(水)10:00～18:00（土日も左記時間で開催） 場所 神戸市役所1号館2階市民ギャラリー ※JR「三ノ宮」駅、阪急・阪神「神戸三宮」駅、神戸市営地下鉄山手線「三宮」駅下車 南徒歩約6分 震災に関する展示・子どもたちへのメッセージならびに協力団体による展示	問い合わせ 神戸市人権推進課 TEL 078-322-5234
淡路市 じんけん市民講座 「人権問題探究コース」	日時 1月20日(火)14:00～16:00 場所 淡路市防災あんしんセンター ※津名ICから車で約5分 講演「子どもたちから学んだ人権～京都市立弥栄中学校を取材して～」 ●講師 林　由紀子さん（毎日新聞社大阪社会部）	問い合わせ 淡路市教育委員会 人権推進課 TEL 0799-64-2521
「つどい」 ～阪神淡路震災 20年・多文化共生 をめざして～	日時 1月25日(日)10:00～16:10 場所 学校法人神戸中華同文学校 ※JR「元町」駅西口から徒歩15分 震災の経験や教訓を伝え（「伝える」）、大災害に備え（「備える」）、復興の成果を発信する（「活かす」）ための、国籍を問わず誰でも気軽に楽しく参画できるフェスティバル ①防災運動会 ②世界の炊き出し ③国際成人式 ④パネルディスカッション「東日本大震災被災地との絆」 ⑤国際こども音楽祭 ⑥1.17は忘れない（震災パネル展示）	問い合わせ 「つどい」実行委員会 （公益財団法人 兵庫県国際交流協会） TEL 078-230-3261

インターネットで「人権文化をすすめる県民運動」の模様を配信中！　人権文化をすすめる　動画　検索

ハーフタイム half time

かつて地域の消防団に入っていました。夜通しで消火活動にあたったことなどが思い出されます。当時は、休日の早朝訓練などが億劫で、早く退団したいと思ったこともありました。今は、世代交代のために退団していますが、地域の人と顔を合わす機会がめっきりと少なくなり、少々さびしさを感じています。今にして思えば、消防団を通した地域のつながりが心地よかったのだろうと思います。

自治会では、祭りやイベントを定期的に開催していますので、積極的に参加するように心がけています。私も「地域のつながり」や「ふるさと意識」が大切だと実感している一人です。

「きずな」の編集においては、人権を通したつながりづくりを意識していきたいと思います。今年もよろしくお願い申し上げます。（小池）

「きずな」は、協会ホームページからもご覧になれます。

（公財）兵庫県人権啓発協会　〒650-0003 神戸市中央区山本通4-22-15　県立のじぎく会館内
TEL 078(242)5355　FAX 078(242)5360　info@hyogo-jinken.or.jp
兵庫県人権啓発協会　検索

2015（平成27）年1月発行